

# 「今こそ、地域公共圏の実現を果たすべき」

**公** 共放送は転換期を迎えている

戦後、NHKは「全国あまねく」を実現し、視聴者のなかに“日本人らしさ”というアイデンティティを構築してきた。

一方、かつて地域に根ざした民放は、1970年代以降、全国ネットワーク化を進め「ナショナル文化」の通路として、ローカルブランドをナショナルブランドへ転化させてきた。

公共放送こそナショナルからローカルへ…放送文化を長く研究されてきた黒田氏に聞いた。



## 黒田 勇

関西大学社会学部教授  
(マスコミュニケーション学専攻)

### プロフィール

1951年生まれ。関西大学社会学部教授。専門はメディア文化社会学。在阪メディアの事情に詳しく、東京＝中央に対して関西という放送の「公共圏」を生み出すことで東京とは異なる考え方や見方を提供することの重要性を指摘している。2005年には日放労関西支部が主催した連続セミナーをもとに、『送り返りのメディアリテラシー』を刊行した。

### 窮地に立つメディア

今、メディアをはじめとする業界は危機を迎えています。

2009年3月期の決算ではキー局が軒並み赤字に転落するなど、暗雲が立ち込めています。そのなかで、インターネットをはじめとしたブロードバンド環境が整い、個人が情報発信をできる時代を迎えています。巷では紙離れが急激な勢いで進み、とある地域の新聞配荷率は50%を切ったとされています。メディア業界を取り巻く環境が、激流の中にある状況、そしてネットで氾濫する情報の洪水。

- ・ 受け手となる市民はどこを頼るのか？
- ・ 送り手となる放送私たちはどうすべきなのか？

送り手・受け手の立場を考え、2005年に「送り返りのメディアリテラシー」の発行にあたり中心的な役割を果たし提言を投げかけた関西大学社会学部教授の黒田勇さんにお話を伺いました。

黒田さんは、放送文化に関して長年研究をされてきただけでなく、在阪民放毎日放送の番組審議委員を務められ、研究者として受け手の視点として、数多くの提言をされています。

### 放送文化を研究するきっかけは

もともとは大学院でBBC<sup>※1</sup>を研究したことがきっかけです。本当は新聞記者志望でしたが、大学院在学中に、マスコミ関連の書籍を読んでいくうち、BBCに興味を持ちました。実際に、修士論文ではBBCはどう変化していくのかをテーマに取り上げ、アカウンタビリティ<sup>※2</sup>の視点から、「公衆（パブリック）はどのように公共放送にアクセスするのか」という研究を行いました。

修士論文を書き上げる過程で読んだ「アナン委員会の報告書」<sup>※3</sup>にも影響を受けました。要約すると、報告書の中では市民のアクセス権を否定していました。誰にでも発言させるのは『パベルの塔』<sup>※4</sup>をつくるようなもので、誰でも情報を発信できるようにするよりは、放送事業者の専門性が発揮されるために、放送の自立が重要であると論じています。修士論文では、このアナン委員会にいかに関論するかを課題として取り組んだのですが、結局、その論理に明快な反論はできず、できるだけ公共放送の依拠する公衆に対し、開かれた組織になるべきだという結論に落ち着かざるを得ませんでした。

しかし、最近はどうでしょうか、世間ではインターネットが盛んになり、誰でも情報を発信できるようになってきました。放送は視聴者・市民が直接意見を番組で表明する場所である必要はなくなつたともいえます。言い換えると、今やだれもが発言できる時代、視聴者・市民が直接「モノ」を言えるというよりは、この「百家争鳴」の時代に、放送はジャーナリズムとして専門性を発揮しなくてはならないのではないのでしょうか。放送事業者は、素人集団ではないし、場所貸し、電波貸しでもない。当然、視聴者・市民の「声」を聞くのは当たり前ですが、そこには自立性が保たれなくてはならないと考えます。

たとえば、パブリックアクセス番組を放送しても視聴者の期待には十分に応えることはできないだろうし、それを見るのは、関係者に限られるのではないかと考えます。あえて言えば、視聴者・市民が、放送を通じて語るのは、パブリックアクセス番組においてではないといえます。視聴者・市民の意見を反映させることと、番組という枠が視聴者・市民に渡されてしまうのとは、意味がまったく異なりま

す。公共放送の役割は、専門的なジャーナリズム活動を市民・視聴者に開かれた形で行うことだと言えるでしょう。

## 地域における公共放送の位置づけ

——公共放送が地域に果たすべき役割とは、どのようなことだと思えますか。

地域における公共放送という視点から考えれば、まず、視聴者・市民が地域の「主人公」となるために公共放送は存在しているということでしょう。視聴者・市民が地域に対して責任を持つ主体として生きていくための様々な情報を提供する、これが公共放送の第一の役割だと考えます。たとえば、関西という地域には固有の政治・経済問題が存在し、その情報と議論の場の提供は、受け手となる市民が、地域の主人公として生きるために必要不可欠のもので、また関西の文化、娯楽番組は、関西に住む人々が地域に愛着を感じ、地域の文化的アイデンティティを維持していくために必要不可欠なものです。こうした地域アイデンティティもまた地域の主人公として生きるために基本的に重要なものです。このように考えると、関西という地域には関西としての「地域公共圏」という考え方が可能なのではないのでしょうか。そして、その公共圏を担うのが公共放送の役割でしょう。

ところで、私自身が大学時代から考えてきた公共放送のあり方として、「なぜ公共放送は国単位なのか？」という疑問がありました。確かに、国家がその領土のなかで、あまねく電波を届けていくと考えるのは当然でしょう。公共放送が果たすべき役割は、「国単位の公共圏に貢献すること」だ、というのでも自明のもののように見えました。

したがって、先ほどの文化的アイデンティティでい

※1「BBC」  
P119参照

※2「アカウンタビリティ」  
説明責任。社会に影響を及ぼす組織はその活動や結果等の報告をする必要があるとする考え。

※3「アナン委員会の報告書」

1970年代にイギリスの商業放送が視聴率重視に走り、公共放送であるBBCの受信料に疑問を呈する視聴者が増えたことを受けて、専門家が放送の将来について検討した報告書、その中で「BBCの主要な目的は視聴者の50%を得ることではなく、多くの人々を楽しませ、その経験を豊かにする面白い番組を提供するべきである」と指摘した。

※4「パベルの塔」  
「旧約聖書」に登場する巨大な塔のこと。パベルの塔を建築する際、世界の言語はひとつであったため、みな協力して作業をすることができたが「天にも届くような塔の建築物」の建設を試みる人間の所行を思い上がりとして、神が激怒し言語をバラバラにし意思疎通ができないうようにした。そのため、塔は完成を見ぬまま頓挫し、人々は世界に散っていったとされている。



ば、「日本人である」というアイデンティティーが大きな括りとして存在しています。それらの構築には、学校教育はもちろんですが、明治以来の新聞の普及と放送が大きな役割を果たしたといわれています。今後も、NHKが全国放送重視でいくなら、それはそれでよいでしょう。しかし、NHKには、今こそ地域文化への貢献が求められていると、私は考えています。その歴史を紐解けば、1980年代までに、テレビ局のネットワーク化が完成しました。それによって、各県に存在した民放局の役割として期待されていた地域文化への貢献が後退し、ナショナル文化の通路として、その役割を果たすようになりました。それは、コマシヤルが全国化することによって、それぞれの地域に存在していた地域の商品ブランドが一気にナショナルブランド化の道を進み、また多くの地域ブランドが衰退した現象が象徴的に物語っています。

そして、民放局による自社編成率・制作率は下降の一途を辿り、それまで地域活性化の役割を果たしてきた民放局が東京の情報を「全国あまねく」伝えるための中継局へと舵を切ることで、地域は置き去りにされています。地方新聞や民放局が衰えていくなかで、今後、NHKにとつては、地域の情報をどれだけ視聴者へ提供できるのかが重要な課題ではないでしょうか。中京圏・

関西圏・関東圏を除けば地域や文化の情報はNHK頼みというのが実情です。

### 地方公共圏を阻害するステレオタイプ

——地域公共圏を視聴者へ提供するためには、何が必要で、何が問題なのでしょう。

この問題は、関西ステレオタイプという視点から考察していくとわかりやすいでしょう。放送の歴史60年が東京中心のまなざしを全国にもたらしてきました。例えば、NHKの『お笑い三人組』<sup>※5</sup>、『私の秘密』<sup>※6</sup>、『夢であいましょう』<sup>※7</sup>等、当時のバラエティー作品の名作は全国同時に同じ楽しみを提供したほか、大河ドラマでは、いくつかの特定の物語（歴史）が繰り返し放送されました。そして、朝の連続テレビ小説は、地方を描きながら、多くの場合、東京を志向する個人の一二代記を描き、日本の近代を伝え、日本人の共通の記憶・経験を創ってきました。そのことによって、地方と中央についての意識の上での序列も明確にし、さらに強化してきたともいえます。

現在の番組では、『1億人の大質問!?笑ってこらえて!』のコーナー企画「ダーツの旅日記」が典型的な例かもしれません。ダーツを投げてそれが当たった地方を訪問し、番組を制作する過程はいかにも、「東京中心のまなざし」で、登場する人物は、いかにも素朴な人たち、そして豊かな自然というパターンで構成されています。この番組は、地方で見ている視聴者も結果として、「東京中心のまなざし」で見て、楽しみ、そしてそのまなざしを当然のものとして内面化していきます。

ちよつと話はそれますが、最近、NHKの『鶴瓶の家族に乾杯』も、同様に「東京のまなざし」で地方を見るとい

※5 「お笑い三人組」 NHKのラジオ・テレビで放送された公開バラエティー番組（1955～66年）。二遊亭小金馬（落語家）、一龍齋貞鳳（講師）、江戸家猫八（ものまね師）の3人が、「あまから横丁」を舞台上に繰り広げるコメディ。

※6 「私の秘密」 NHK総合テレビで1955年～67年に放送されていたクイズ番組。何かしらの特技・趣味・自慢をもった素人が出てきて、有名人の解答者がトクのかなからそれを当てて形式で、アメリカの人気番組を日本版にリニューアルしたもの。番組の冒頭で、高橋圭三アナウンサーが「実は小説より奇なりと申しまして、世の中には変わっためずらしい経験をお持ちの方が沢山いらっしゃいます」と言うのが特徴的であった。

※7 「夢であいましょう」 NHK総合テレビで1961年から66年に放送されていたバラエティー番組。日本のテレビ放送の黎明期における代表的なバラエティー番組のひとつと評される。歌手がコントに出演したり、コメディアンが歌ったりするなどの企画は、後続のバラエティーの原型となったと言われている。

う典型的な番組かもしれません。ただ、「東京中心のまなざし」を持たない笑福亭鶴瓶さんというキャラクターを十分生かしている点で、面白い仕掛けをしていると思います。彼は、東京人ではないという意味だけでなく、「庶民目線」を持ったタレントとして、知識や権威を象徴するこれまでのNHK的な作りを破壊しているようにも見えます。

話を元に戻しまして、「東京のまなざし」による地方の序列化の極端な例として、「関西へのまなざし」というものも存在しています。テレビの世界がなんとなく漠然と設定する全国的なまなざしを「東京のまなざし」と表現してきましたが、そのまなざしのリアリティーを明確にするために、大変強烈な逸脱として、「関西へのまなざし」が使われてきました。たとえば、アニメの世界では、かつての「ヤッターマンの悪役」やさまざまな「動物キャラクター」として、▼中心的な価値からの逸脱、▼非日常、▼私たちとは異なる「彼ら」的存在、などに関西弁が割り当てられています。さらに、逸脱した象徴として、つまり「彼ら」的存在の象徴として、「関西」なり「大阪」という地域が、ステレオタイプ的にデフォルメされ、これらが関西の放送の中でも無反省に、そして無自覚的に再生産されています。

この問題でインターネットを検索すると、大阪、あるいは関西の人が不快に思い、イライラしている様子がわかります。ただ、一番怖いと感じるのは、こうした反発がかつてほど強くなり、「そういう存在」であることを関西人の多くが認めつつあることです。理由を問えば、「テレビでそう言っていた」と関西の人自身が言うのです。

## 公共放送NHKへの期待

——「ステレオタイプ化された関西」を関西の人が受け入れていることの、何が問題なのでしょう。

視聴者が地域の主人公で無くなっているということではないでしょうか。自分たちの地域が名指しされ、面白おかしく、時に劣ったものとして描かれていることを受け入れている状況はある意味で異常な事態でしょう。「関西」という地域には、解決すべき問題が様々に存在することは事実ですが、それをメディアが表現するステレオタイプの関西の特性に結び付ける言説が関西の放送でも目立ってきています。

関西地域の主体形成に責任を持つ公共放送としてのNHKは、関西地方の文化的特性を活かし、素晴らしい番組を全国に発信してきました。しかし、今関西の地域資源を掘り上げていく努力にやや陰りが見えると感じるのは私だけではないと思います。

関西のメディアがビジネスとして、作り上げたステレオタイプに疑問を呈し、地域の主体を尊重し、関西人自身をリスパクトしつつ、専門性をもったジャーナリズムを展開する、それは公共放送としてのNHKに課せられた責任でしょう。今こそ公共放送NHKは、視聴者に議論の場を提供し、「地域公共圏」の実現を目指すべきだと考えます。

報告 関西支部書記長 服部 慶典